私の家族

作・山口茜

登場人物

フナコシカヤ 銀行員。5年前まで写真サークルトラストに入っていた。久しぶりにこの喫茶店を訪れる。埼玉出身。

モリタクヤ マスターの幼馴染。離婚後しばらくして息子を引き取ったが、現在は息子を喫茶店に預け一人暮らしをしている。喫茶店の常連。大阪で生まれ育ったが就職と結婚で神奈川へ行き、離婚後また戻った。

マスター この喫茶店を経営している。ママ（ナツコ）が少し前に失踪した。大阪出身。

オモテミサ モリやマスターと元夫が幼馴染で、この店の常連となった。元夫は失踪している。奈良出身、就職で大阪に住んだ。

エトウクミ 過去に写真サークルトラストでカヤと出会う。兵庫出身。

モリアキラ モリの息子。現在は喫茶店で養育されている。神奈川出身。

1

舞台は大阪の小さな町にある喫茶店。ここには居住スペースが併設されている。こだわりの無さがアンバランスさを生む店内。昭和感が溢れているが、作為的なものではなく、時代についていけなかった感じ。一部のテーブル席のテーブルや椅子にはよくわからない紙類や置物類で溢れていて、営業しているのかどうなのか、いまいちわからない。

外は小雪がちらついている。

モリがカウンターに座っている。目線は時々ハッチの方へ向く。

そこにアキラが帰ってくる。モリをちらっと見るが気にしていない様子。

アキラが入って行った奥の部屋を見つめるモリ。そこにカヤが入ってくる。

カヤはモリに気がつくが、モリはカヤを見ないのでしばらく立っている。

モリがカヤを見る。

カヤ「マスター、います？」

モリ「あー」

カヤ「……」

モリ「奥に」

カヤ「あ、そうですか」

モリ「……」

間

モリ「呼んできましょうか」

カヤ「あ」

モリ「マスター」

カヤ「いや、えっと」

モリ「呼んできます」

カヤ「あ、すいません」

モリ、店の奥へ。カヤは一人になるとスマフォを取り出してラインを開く。待ち合わせたクミと連絡がつかない。モリ出てくる。カヤ、スマフォをしまう。

モリ「すぐ来ます」
カヤ「あ」

モリはカウンターに置いてあったコートを羽織って出て行こうとする。

カヤ「あの」
モリ「……」
カヤ「……ありがとうございます」
モリ「いえ」

モリはクミのコートをテーブル席からカウンターへ移動させる。

カヤ「あ、すいません、なんか」
モリ「え？」
カヤ「いえ」

間

モリ「この店なんですけど」
カヤ「はい」
モリ「あ、でもマスターの知り合いか」
カヤ「え？」
モリ「いや、すいません」
カヤ「あ、の、知り合いというか、よく来てたんです、５年……６年ぐらい前」
モリ「へえ」
カヤ「集まりがあって、いつもここだったんで」
モリ「もうすぐ出てくると思うんですけど」
カヤ「はい」
モリ「マスター」
カヤ「元気ですか」
モリ「え？」
カヤ「マスター」
モリ「ああ……」
カヤ「ナツコさんがいなくなったって聞いて」
モリ「元気ですよ。元気っていうか、変わらないですね」
カヤ「そうですか、」
モリ「……」
カヤ「お友達ですよね、マスターの」
モリ「はい」
カヤ「何回か、ここで」
モリ「あー」
カヤ「いえいえ、いいんですけど、私はあの……クミちゃんの」
モリ「……」

カヤ「覚えてないですよね」
モリ「あー……」

スマフォからラインの着信音がする。

カヤ「ちょっとすいません」
モリ「はい」

カヤはスマフォを耳に当てる。クミにつながる。

カヤ「あ、クミちゃん？よかった、え？私……うん、そうそう、もう中に入ってるんだけど……え？……何？お店の？え！？……ええ？ごめ・・」

電話は切れたようだ。マスターが出てくる。

マスター「カヤちゃん」
カヤ「あ」
マスター「来てくれたん」
カヤ「マスター」
マスター「ホットでいい？」
カヤ「……」
マスター「どした？」
カヤ「いや、はい（とカウンターに座る）」
マスター「ホットホット」
カヤ「……」
マスター「今日は一人？」
カヤ「クミちゃんと待ち合わせしてるんですけど」
マスター「あれ、カヤちゃんアメリカンやったっけ」
カヤ「あ」
マスター「な」
カヤ「はい」
マスター「そやったそやった。薄めが好きな人でした」
カヤ「覚えてくれてるんですか」
マスター「そらそうや」
カヤ「嬉しい」
マスター「雨の日やってんけどな」
カヤ「……」
マスター「朝起きたらもう化粧しとんねん、ナツコ」
カヤ「……はい」
マスター「で、買い物行ってくるっていうから、ああ、っていうて、お前スーパー行くのに化粧すんのって、思ったけど言わへんかってん、あいつ一回怒ったらしつこいやろ、朝から喧嘩したくないし。んで行ってきまーすって言って、出てって、あれ、と思って時計見たら、まだ6時やったわ。朝の。それから今日で三ヶ月、まだ帰ってきてない」
カヤ「……」
マスター「何やと思う」

カヤ「え？」
マスター「何してるんやと思う」
カヤ「……」
マスター「車停めるとこ探してるんやろか」
カヤ「あ、……（笑う）」
マスター「あるいは買いたい商品に半額シールが貼られるのを待っているとかね……スーパーが広すぎるとか……」
カヤ「……」
マスター「はい。アメリカン」
カヤ「……あ、あの……」
マスター「大丈夫」
カヤ「よかったです」
マスター「何もええことあらへんけど」
カヤ「いや、あの、そういう意味じゃなくて」
マスター「カヤちゃん。一緒に旅行行かへん？」
カヤ「……」
マスター「どっか。ハワイとか」
カヤ「……それは……常連客の皆さんと……みたいなやつですか」
マスター「どっちでも」
カヤ「どっち……」
マスター「みんなでも、二人でも」
カヤ「……あじゃあ、クミちゃんが行くっていうなら」
マスター「何が引っかかる？」
カヤ「え？」

マスター「なんか引っかかることある？」
カヤ「・・いや……いや」
モリ「マスター」
マスター「？」
モリ「さっき、言うてたことなんやけど」
マスター「え？」
モリ「ここで。さっき」
マスター「……」
モリ「クミちゃんと」
マスター「……お前」
カヤ「クミちゃん」
マスター「ごめんごめん、砂糖とミルク」
カヤ「クミちゃん、来たんですか」
モリ「あれ……ほんまの話なん」
マスター「……なんやねんそれ」
モリ「……」
マスター「黙って座っとけ」
モリ「……」
マスター「クミちゃん、きたよ」
カヤ「今は、どこに……？」

オモテが帰ってくる。モリはハッチの前に立つ。
マスターはコーヒーを淹れ始める。

オモテ「(モリに) 何してるんですか」
モリ「……」
マスター「昔よう来てくれててん」

マスターはカウンターにあったクミのコートを別の場所に移動させる。
オモテはカウンターにいるカヤの隣に座る。

オモテ「あ、そうなんや」
カヤ「(頭を下げる)」
オモテ「私も昔、ここの常連やったんですよ」
カヤ「そうなんですか」
オモテ「モモリちゃんも」
カヤ「……あ」
オモテ「しょっちゅうあつまってたね、みんなで」
マスター「うん」
オモテ「せやけど結局ナッちゃんがおらへんようなってしもたから。で、ちょっとお店手伝ったりとかして。ね。私と、モモリちゃんと」
カヤ「あぁ……」

間

オモテ「オモテって言います」
カヤ「?」

オモテ「私」
カヤ「あ、あ、私、フナコシです」
マスター「へえ、名字知らんかった」
カヤ「あ、そうでしたっけ」
マスター「みんなカヤちゃんて呼んでたなあ?」
カヤ「そうですね、サークルの人は」
オモテ「カヤちゃん」
カヤ「はい」
オモテ「すいませんなんかこっちの話ばっかりして」
カヤ「いえいえいえ」
オモテ「聞き上手ですね」
カヤ「私ですか」
オモテ「うん」
カヤ「えーそんな、」
オモテ「言われたことないですか」
カヤ「初めてです」
オモテ「ね」
マスター「ええ?」
オモテ「彼女」
マスター「カヤちゃん?」
オモテ「(コーヒーを飲む)」
マスター「(カヤに) 真ん中」
カヤ「え?」
オモテ「一番下」

カヤ「？」
オモテ「モモリちゃんは」
モリ「上」
オモテ「どう」
カヤ「え？」
オモテ「ごきょうだいはいらっしゃるの？」
カヤ「あ、いや、えっと……兄が一人」
マスター「お？てことは……」
オモテ「私？やったー」
マスター「そうかカヤちゃん、末っ子かぁ」
オモテ「いきなりきょうだいの数聞かれたらびっくりするでしょ」
カヤ「あーでも私よく一番上って言われますけどね」
マスター「カヤちゃん？」
カヤ「はい。なんかしっかりして見えるみたいで」
マスター「見える」
オモテ「さっき真ん中いうたやん」
マスター「真ん中がしっかりしてるんやん」
オモテ「（カヤに）でもご両親は幸せですね、こんなしっかりした娘さんがいらっしゃって」
カヤ「いやいやいや」
オモテ「何したはるんですか」
カヤ「あ……うちの両親ですか」
オモテ「うん」
カヤ「埼玉に住んでます」
オモテ「へえ」
カヤ「もう定年退職してるんですけど」
オモテ「じゃあ、夫婦水入らずで」
カヤ「水入らずっていうか……そうですね」
オモテ「あ、そう」
カヤ「はい」
オモテ「モモリちゃん」

オモテ、立ち上がりモリの座っていたテーブルに移動する。

オモテ「（モリをじっと見つめる）」
モリ「え？」
オモテ「……」
モリ「（カヤを見つめる）」
カヤ「……え？」
モリ「……なんか教えてる……人」
オモテ「なんかって何」
モリ「国語」
カヤ「……」
オモテ「インストラクター。スポーツクラブの」
マスター「ペットショップ。トリマーていうんやっけ、あれ」
カヤ「あ、私ですか」
オモテ・マスター「うん」
カヤ「会社員です」

オモテ「全員ハズレ」
マスター「え、ペットショップも会社といえば会社じゃないの」
オモテ「あんたトリマー言うたやん」
マスター「トリマーも社員やろ」
モリ「それは人によるんちゃうか」
オモテ「どういうお仕事されてるんですか」
マスター「会社ってどこのペットショップ？」
カヤ「……銀行で」
オモテ「うわぁ大変じゃないですか銀行員って」
マスター「ほんまやぁ」
オモテ「なあ……」
マスター「……」
オモテ「モモリちゃん」
モリ「……大変ていうのは、仕事の内容が？」
オモテ「そうそう。お金扱うんやから」
マスター「せやな」
モリ「……」
オモテ「え、大変じゃない？大変ですよね？」
カヤ「そうですね、まあ、楽ではないです」
オモテ「ほら」
モリ「……」
マスター「偉いわ。そういうとこできちっと働いて」
カヤ「でももうやめようかと思ってて」
オモテ「え」
カヤ「はい」
オモテ「それは、また、どういうわけで」
カヤ「……うーん……なんでこんなことやってんだろうっていう気持ちになっちゃうっていうか……」
オモテ「せやけどもったいないわ。せっかく銀行で働いてんのに。なあ」
モリ「うん」
カヤ「この歳で再就職は難しいですよねやっぱり」
オモテ「就職しないっていう手もあるけど」
カヤ「でもそれだと生活が……」
オモテ「なんとかなる」
カヤ「なりますか？」
オモテ「なるなる。な、モモリちゃん」
モリ「いやぁ、」
オモテ「せやけどすごいな。なんとなく銀行員になる？普通」
カヤ「いや、でも父が銀行員だったんで」
オモテ「かっこいぃ」
カヤ「いやいや、もう、本当、真面目なだけで」
オモテ「モモリちゃん、この人やわ」
カヤ「え？」
オモテ「カヤさん。モリ君。４５歳。独身」
カヤ「はぁ」
オモテ「うん」

オモテ、マスター、出て行く。

カヤ「え？」
モリ「……」
カヤ「なんで、出てったんですか」
モリ「いやぁ……」
カヤ「……お仕事は、何をされてるんですか」
モリ「……ああ……会社員です、普通の」
カヤ「へえ……」

クミ、裸足で出てくる。

カヤ「クミちゃん」
クミ「……」
カヤ「え？」

オモテが氷嚢を持って出てくる。

オモテ「大丈夫」

クミはオモテの氷嚢を受け取ってほおを冷やす。

オモテ「座り」

クミはテーブル席の椅子に座る。

カヤ「クミちゃん」
オモテ「知り合い？」
カヤ「はい」
オモテ「そうやったんですか」
カヤ「何があったんですか」
オモテ「マスターと、喧嘩して」
カヤ「え」
クミ「……」
カヤ「なんで？」
オモテ「クミちゃん」
クミ「……」
カヤ「クミちゃん」
クミ「私が悪いねん」
カヤ「え、どういうこと？」
クミ「もうほんまに、自分が嫌んなる」
カヤ「クミちゃん、」
クミ「ごめんなさい」

クミ、奥へ戻る。オモテ、後を追う。

カヤ「え、なん、何が起きてるんですか」
モリ「たぶん大丈夫です」

カヤ「え？」
モリ「あ……こないだのあれでいうと、ですけど」
カヤ「こないだのあれ？」
モリ「……」
カヤ「こないだのあれって？」
モリ「写真サークルトラスト」
カヤ「あ、」
モリ「思い出しました。よく来てましたよね」
カヤ「はい」
モリ「クミちゃんも」
カヤ「何が原因でケンカになったんですか、二人は」
モリ「なんか、いい加減なところがあるって」
カヤ「クミちゃんが？」
モリ「はい。それで喧嘩になって、ミサちゃんが間に入って、なんとか終わるっていうのがこないだのあれで」
カヤ「ミサちゃん」
モリ「オモテさん」
カヤ「あぁ」
モリ「……」
カヤ「えでもクミちゃんがいい加減って、サークルの時はそんな感じじゃなかったんですけど、」
モリ「……」
カヤ「どっちかっていうと、真面目で、ミーティングも、クミちゃんだけいつも時間通りに来るっていう感じで」
モリ「や、でも聞いた話なんで」
カヤ「マスターが言ってたんですかそれ」
モリ「いやぁどやったかなぁ……」
カヤ「クミちゃんがマスターと喧嘩するってのもなんか信じられなくて」
モリ「でもそれ、ミサちゃんがものすごい上手にまとめるんですよ」
カヤ「ああ」
モリ「二人ともなんか色々言うてんねんけど、ミサちゃんが間に入ったらすっと終わる。っていうのがこないだのあれ」
カヤ「なるほど」
モリ「……」
カヤ「いつもそやってカウンターに座ってましたね」
モリ「うん」
カヤ「覚えてます」
モリ「いっつも遅くまで話し込んでましたよね、トラスト。マスターがあいつら朝までいるつもりやってよう言うてた」
カヤ「うわぁすいません」
モリ「いや俺は別にいいねんけど」
カヤ「ほんと朝になることよくあったんで」
モリ「えっ」
カヤ「えへへ」
モリ「え、朝まで空いてたんですかこの店」
カヤ「マスターが付き合ってくれて」

モリ「すごいなあいつ」
カヤ「しかも話し合いの内容はなんか誰と誰が付き合ってて、その人が他の人とも付き合ってる、とか言って、それが良くないみたいな、そんな話ばっかりでしたけど」
モリ「写真サークル」
カヤ「えへへ」
モリ「トラスト」
カヤ「トラスト。マスターもよく中に入って意見言ってました」
モリ「何やってんねんあいつ」
カヤ「でしょう、私もすごいなあと思って」
モリ「すごいわ、ほんま」
カヤ「ああでも、私は全然、そんなのは無かったですけどね」
モリ「そうなんや」
カヤ「はい」
モリ「……巻き込まれへんかったん」
カヤ「その時は好きな人がいたんで」
モリ「……」
カヤ「なんか……」
モリ「はい」
カヤ「もちょっと待ちます、クミちゃん」
モリ「……」

カヤはテーブル席に座る。オモテ、戻ってくる。

オモテ「今日、待ち合わせてたんやって？クミちゃんと」
カヤ「はい」
オモテ「ごめんねほんまに。お昼ご飯ってもう食べた？」
カヤ「あ、まだです」
オモテ「あ、じゃあ、よかったら一緒にどう？クミちゃんも居るし」
カヤ「あー」
オモテ「聞いてあげて、話。最近全然写真撮らへんようなってしまったから」
カヤ「クミちゃんですか？」
オモテ「マスターと付き合い始めたみたいで」
カヤ「……」
オモテ「楽しんではるわ。中学生みたいやろ」
カヤ「仕事は」
オモテ「もやもやもやもやしてる」
カヤ「え？」
オモテ「私な、しゃべってんの聞いただけで、その人が何考えてるかわかるねん」
カヤ「……」
オモテ「本人がどう思てるかは知らんよ？でも、ほんまの気持ちっていうんかな……本性っていうか、そういうのがわかってしまうねん。だからもう大変やねん、キャッチしてしまうから」
カヤ「もやもやしてますか私」
オモテ「でも素直で性格がいい。真面目すぎてもやもやする。自

分に自信がない」
モリ「また始まった、占いが」
オモテ「違うねん、わかるの本当に」
カヤ「(笑)」
オモテ「ここに住む？カヤちゃんも。仕事辞めて」
カヤ「あ、え、」
オモテ「ここやったら、家賃もいらんし、もうマスターの持ち家やから。二階にいっぱい部屋があって、みんなそれぞれ、好きなことしながら時々店番するっていう感じで。な、モモリちゃん」
モリ「ああ」
カヤ「あ、」
オモテ「モモリちゃんはまだやけどね。でも誘ってるんです、ずっと」
カヤ「え、あ、じゃクミちゃんもここに住んでるんですか」
オモテ「そう。いうてへんかったん？あの子」
カヤ「はい」
オモテ「ほんまにやりたい仕事が見つかるまで、とかでいいと思うんですよ。ここに住んで、みんなで助け合って生活して」
カヤ「私……」
オモテ「ん？」
カヤ「私……それやりたいかも」
オモテ「あ、ほんま？」
カヤ「……（頷く）……あ、あの……いや、本当に、よかったら、ですけど」
オモテ「当たり前やん！」
カヤ「でも、いいのかな、クミちゃんとか」
オモテ「いいに決まってるやん。マスターも大喜びするわ。おいで。ご飯食べよう」
カヤ「あっ」
オモテ「ちょうどよかったわ、ご飯作りすぎてん」

カヤとオモテは奥に入る。モリはそっとハッチを開ける。
モリはハッチの中に手を伸ばしてボタンを取る。
クミが雑巾とバケツを持って出てくる。

クミ「ボタン？」
モリ「うん」
クミ「ナッちゃんは？」
モリ「(首を振る)」
クミ「でもほんまに昨日まではここにいてん」
モリ「(クミの顔を見て) 大丈夫か」
クミ「私、やっぱり出て行こうと思ってる、この家」
モリ「え？」
クミ「ごめん」
モリ「いや、別に俺はかまへんけど」
クミ「このこと、誰にも言わんといて。私が出て行くまで」

マスターが出てきて、ハッチを閉める。

モリ「ナッちゃん、どこにいった」
マスター「帰れ」
モリ「え？」
マスター「（顎でドアを指す）」
モリ「マスター」
マスター「モリ」

間

マスター「なんやねん」
モリ「……」
マスター「なんや」
モリ「……」
マスター「お前な、関係ないやろ」
モリ「何が」
マスター「なんやねん。お前こそなんでここにおんねん。邪魔をするな」
モリ「マスター」
クミ「モモリちゃん、帰って。お願い」
モリ「……」
クミ「お願い」
モリ「でも」
クミ「……」
マスター「頼む、帰ってくれ」
モリ「……」

モリは奥に行こうとする。

マスター「どこいくねん」
モリ「……」
マスター「待て」

アキラがスマフォを見ながら出てくる。

モリ「アキラ」
アキラ「……」
モリ「おい」
アキラ「お前さぁ、金も払ってないくせに何親づらしてんの？」

オモテが出てくる。

オモテ「何してんの？」
マスター「駅前の郵便局やんな」
オモテ「はよ、行って、モタモタしてたら帰ってしまうで」
マスター「アキラ」
オモテ「あ、ちょっと待って。ナッちゃん車乗せたら、２時間ぐらいドライブしてから帰ってきて」

マスター「わかった」
オモテ「脅かしたらあかんで。ほんまに心配してたんやっていう感じで」
マスター「どこ行く」
アキラ「え？」
マスター「ドライブ」
アキラ「何それ」
マスター「高速道路ぐるぐるする？」
アキラ「何それ意味わかんね」
マスター「わかるやろ。何がわからんねん」
アキラ「あじゃあさ、飯おごってよ」
マスター「松」
アキラ「松屋以外で」
マスター「俺松屋以外知らんねん」

マスターとアキラは出て行く。

モリ「どこいったん」
オモテ「ああ……ナッちゃん帰ってきたから」
モリ「……」
オモテ「モモリちゃんもご飯食べて行くか」

――オモテ奥へ戻る。

2

1から1ヶ月後。カヤがカウンターでコーヒーを淹れている。
オモテがカヤの淹れたコーヒーを飲んでいる。
クミは掃除をしている。

オモテ「おいしい」
カヤ「……」
オモテ「このお店カヤちゃんのお店にしたら？もう」
カヤ「え？」
オモテ「あの人最近忙しいし」
カヤ「マスターですか」
オモテ「パチンコな」
カヤ「ああ」
オモテ「昼間開いてへんかったらもう喫茶店ちゃうやろ」
カヤ「(笑)」
オモテ「せやし、カヤちゃんが昼間開けてくれたら」
カヤ「本当ですか」
オモテ「やりたいんやったら」
カヤ「やりたいです」
オモテ「改装するんやったらお金出すで」
カヤ「いやあでもそれは」
オモテ「まかせとき。それが私の役目なんやから」
カヤ「なんかでも……悪いです」

オモテ「大丈夫。私、カヤちゃんのこと大好きやから（クミに）な、この店」
クミ「え？」
オモテ「カヤちゃんがお店やったらいいと思わへん？コーヒー作るのうまいし」
クミ「……」
カヤ「あ、ごめ、飲む？コーヒー」
クミ「私のめへんから」
オモテ「飲みいや」
クミ「え？」
オモテ「せっかく淹れたげる言うてくれてんねんから」
クミ「ああ……」
オモテ「どんなお店にしたい？ここ」
カヤ「……どんなお店……・エーーー……・北欧とか私好きなんですけど」
オモテ「……それはどういう」
カヤ「なんか、全部木でできてて」
オモテ「へ？」
カヤ「えっと」
オモテ「今も結構木やけどね」
カヤ「あ、なんか、こういう木じゃなくて、白樺みたいな」
オモテ「白樺」
カヤ「はい、多分」
オモテ「北欧って白樺なんや」
カヤ「いや、ちょっと、調べます（とスマフォを出す）」
オモテ「……」
カヤ「わあ、でもなんか、そういうの考えてたらワクワクしますね」
クミ「会社、まだ辞めてへんねんて？」
カヤ「……」
クミ「何が不安？」
カヤ「不安、とかじゃないんだけど」
クミ「でも実際辞めてないんやろ？」
カヤ「辞めるつもりだよ」
クミ「だけどまだ辞めてない」
カヤ「え、なになに」
オモテ「クミちゃん」
カヤ「……」
オモテ「カヤちゃん、ごめんごめん、別に責めてるわけじゃないねんこの子も」
クミ「信じられへんってことやろ？」
カヤ「え」
クミ「私らが」
カヤ「そんなことない、え、なに、クミちゃん、どうしたの？」
オモテ「クミちゃんその言い方はちょっと違うんちゃう？」
カヤ「……」
オモテ「この店、全部白樺にしたらええやん。そしたらカヤちゃん、ワクワクするんやろ？私はそれが嬉しいねん。それが私の生

き甲斐やねん。あれやったらモモリちゃんにも助けてもらったらえええやん。な」
カヤ「ああ……」
クミ「でもモモリちゃんあんまりここに住みたがってないよね」
カヤ「え、」
オモテ「住みたがってないことはないと思うけど？」
カヤ「……」
オモテ「カヤちゃんもいるんやし。なあ」
カヤ「いやそんな」
オモテ「クミちゃんどうしたんあんた、なんかおかしいで」
カヤ「あ、一緒にやる、喫茶店」
クミ「……」
カヤ「ね、一緒っていうかみんなで」

――間

カヤ「ナツコさんって……どっか行ったんですか」
オモテ「え？」
カヤ「いや、」
オモテ「……」
カヤ「あ、いや、何か、こないだここ帰ってきた時、すごい喜んでたから、みんな」
オモテ「……」
カヤ「またいなくなっちゃったんだなと思って」
オモテ「正直私、そのことめっちゃショック受けてるんよ今」
カヤ「ですよね」
オモテ「そもそもはね、マスターの浮気が原因やってん」
カヤ「あ……」
オモテ「で、相談乗って欲しいっていうから私、毎日ここに来てさ、ナッちゃんの愚痴聞いて、マスター怒って、それでも全然治らへんし、おかしいなあ思ってさ、よう観察してみたんよ。ほんで気がついてん、ナッちゃんがおかしいって」
カヤ「え？」
オモテ「あれはナッちゃんに問題があった。な、クミちゃん」
クミ「うん……」
オモテ「そら浮気はあかんよ。そのことについては私、クミちゃんにもちゃんと言った。でもさ、ナッちゃん、毎日マスターに怒って泣いて、愚痴言って。せやから私、そんなんやから浮気すんねんでって言うたんよ、ほんならナッちゃん泣き出してさ」
カヤ「ああ……」
オモテ「そっから今度はナッちゃんを怒る毎日よ。も、私、参ったわ、この人らに振り回されて」
カヤ「……」
オモテ「どうしたん」
カヤ「うちも一緒なんです」
オモテ「一緒って？」
カヤ「父がずっと浮気してて」
オモテ「そうやったん」

カヤ「だから水入らずとかもう」
オモテ「うちも一緒やで。お父ちゃん、浮気して、酔っ払って帰って、お母ちゃんのこと殴って、私がお母ちゃんの前に立ったら、今度は私のこと金属バット持って追いかけ回して。あれ金属バットって打ち所悪かったら死ぬでしょ。毎日、今日は殺されるんちゃうかって思いながら……震えながらお母ちゃん庇ってたわ」
カヤ「……」
オモテ「でもそのあと結局お母ちゃん妊娠してさ。弟が生まれて……今ではいい思い出」
カヤ「……」
オモテ「(電話がかかってきて)あ、モモリちゃんから。ちょっとごめん。もしもし?ああ・・」

オモテは電話しながら外に出る。

クミ「カヤちゃんってさ、何がしたいの」
カヤ「え?」
クミ「ほんまに喫茶店、やりたかったん」
カヤ「……え、何それ」
クミ「マスターからこの店引き継ぐっていう覚悟、ちゃんとあるの」
カヤ「……ちゃんとっていうか……オモテさんがそうしたらって言っただけで私別に」
クミ「何」
カヤ「……」
クミ「カヤちゃんは別に、やりたくないってこと?」
カヤ「いや……え、クミちゃんがやりたいの?」
クミ「何を?」
カヤ「この店」
クミ「なんで?」
カヤ「え、やりたいんじゃないの?」
クミ「何でそういう話になるん」
カヤ「だって」
クミ「……」
カヤ「えなんかちょっとよくわからないんだけど」
クミ「……」
カヤ「来ないほうがよかった?私」
クミ「正直、来てほしくなかった」

オモテとナキヲ、モリが戻ってくる。モリは足を引きずっている。

オモテ「座り」

モリはテーブル席に座る。ナキヲ、奥へ行く。

オモテ「全治三週間ぐらいか」
モリ「そうやな」
オモテ「もう痛くないんやろ?」

モリ「動かさんかったら」
オモテ「良かったぁ、もう心配したんやでほんまに」
カヤ「どうしたんですか」
オモテ「モモリちゃん、車にひかれてん」
カヤ「……」
オモテ「(クミに) ちょっと、なんか冷やすもん持ってきて」

クミは出て行く。

カヤ「病院は、」
オモテ「モモリちゃんが行きたくないって」
カヤ「えっ」
オモテ「な」
モリ「うん」
オモテ「もうこれで逃げられへんで。な、モモリちゃん。ここに住んで。ご飯も洗濯も、ここやったらやる人がおんねんから。カヤちゃんも心配やろ、こんな状態で、一人で生活するって」
カヤ「はい」
オモテ「ほら」
モリ「……」

マスターが戻って来る。

マスター「あかんわケチくさい、ベンツ乗ってんのに」
カヤ「おかえりなさい」
もり「どうやった？」

マスターはお金をテーブルの上に置く。宅急便の荷物も持っている。

マスター「動画も撮ってあんねんでっていうてやっとそれ」
オモテ「もう、マスター。モモリちゃんがぶつかった後うちら、慌てて通報しようとしたらこの人がモモリちゃんと一緒になって止めてさ、向こうの人睨みつけて」
マスター「ちがうちがう、お母ちゃんあんた現場おらへんかったやろ」
オモテ「せやけど結局、ベンツの人、怖なってしまわはったんやろ、マスターと話して」
マスター「僕は、警察に行く前にそのベンツ乗っとったやつに相談しようっていうてん。それだけ」
カヤ「え、でも、大丈夫なんですか、モリさん」
オモテ「心配やろほんま」
モリ「大丈夫。そのうち治る」
マスター「これ、カヤちゃんの実家からや」
カヤ「え……」
オモテ「うわぁ牛肉やって」
カヤ「え、何で」
マスター「昨日連絡してん、カヤちゃんの実家に」
カヤ「ん？」

オモテ「せやけどさすがカヤちゃんのお母さんやな」
マスター「ほんまや、牛肉送ってくるって」
オモテ「アホ。連絡が早いっていうてんねん。クミちゃんとこなんか未だに連絡ないんやから」
カヤ「……」
オモテ「ね、今度、実家のお父さんとお母さん、紹介して。私、会ってみたいわあ、カヤちゃんのご両親」

クミ、氷嚢を持って出てくる。

オモテ「何やってんの」

クミは氷嚢をモリに渡す。

オモテ「カメラ」
クミ「あ、はい」

クミ、出て行く。

オモテ「な。みんなで写真撮らへん？」
カヤ「え、」
オモテ「な！記念写真」
カヤ「記念写真」

クミがカメラを持って出てくる。アキラも出てくる。

オモテ「よしよし撮ろう撮ろう。並んで」
カヤ「え、でも」
オモテ「何？」
カヤ「いや……」
オモテ「家族写真」
カヤ「あ、じゃあ私が」
オモテ「ちゃうちゃうちゃうカヤちゃんこっち（とモリの横に）。（アキラに）息子はお父さんの横」

クミがカメラを構える。

カヤ「あれ、でもやっぱ、わたしが撮った方が良くないですか」
オモテ「全員入る？」
クミ「あ、……」
オモテ「入るん？」
クミ「（レンズ越しに見たり、カメラを外してみたりを繰り返す）」
マスター「返事せえよ」

ハッチの方から音がする。

カヤ「あ、今、なんか」
オモテ「ねえ、何を確認してるの？」

カヤ「あの、」
マスター「あいつ久しぶりに写真撮りたいっていうて、どんくさいなほんま」
クミ「いや、なんかこのカメラよくわからなくて……」
カヤ「なんか聞こえないですか」
クミ「おっけ、これで全員入ります」
オモテ「ハイ行こ」
クミ「じゃ……」

クミ、シャッターを押す。

オモテ「ちょちょちょ、なんか言うてよ」
クミ「あ、ごめん」
オモテ「撮るよーとか」
クミ「はい、じゃあ、とりまーす」

長い間。

マスター「ちょ、」

ハッチからの音。クミ、シャッターを押す。

カヤ「あの、」
オモテ「あれ、それじゃ全然わからへんよねみんな」
クミ「あーあれ、えっと」
マスター「お前写真クラブやったんちゃうんか」
クミ「うん、いや、あの、えっと……」
マスター「はいチーズや」
クミ「え？」
オモテ「知らんの、はいチーズって」
クミ「いや、知ってるけど」
マスター「知ってるんやったら言えよ」
オモテ「写真クラブやのに」
マスター「なあ！」
クミ「すいません。じゃあ、はいチーズ。あれ？あれ？……」
マスター「（声を変えて）勘弁してくださいよクミさーん、俺が悪いみたいじゃないですかぁ一生懸命働いてるのに」
オモテ「カメラの心の声やろそれ」

アキラ以外笑う。

アキラ「もういい？」
オモテ「あかんまだ」
クミ「なんかこのカメラ難しくて……ここか！いけます。はい、チーズ！」

シャッター音。ハッチからの音。

オモテ「何枚か撮って」
クミ「ああ、はい（ともう一度しゃがむ）。はいチーズ。はいチーズ。はいチーズ、はいチーズ、はいチーズ、はいチーズ」
マスター「いつまでやんねんな」

――――――みんな笑う。――――――

クミ「あ……」
マスター「そんな何枚も何枚も撮って、綺麗に映ってへんかったらお前も車に飛び込ますぞ」

オモテはカメラをクミから受け取り、撮った写真を見る。

オモテ「え、なにこれ」

みんなカメラを覗き込む。

マスター「あれ？」
オモテ「クミちゃん？」
クミ「ん？」
オモテ「全部カヤちゃんのどアップやん」
クミ「いや、そんなつもりは」
マスター「つもりはなくてもそうなってるねん、」
クミ「……」
マスター「お前、もしかしてレズなんか」
オモテ「もう変なこと言わんといて。カヤちゃん困ってるやろ」
カヤ「いや、」
オモテ「あ、あんた（とアキラを見て）ボタンとれてるやんその服」
マスター「今度は誰をやったん」
アキラ「なんだよそれ」
オモテ「カヤちゃん、あとでボタンつけたってこの子」
カヤ「ああ……はい」
マスター「女か」
オモテ「マスター」
アキラ「あんたもやっただろ」

アキラはハッチを開けるがマスターが閉じる。

マスター「ボタンってさ、なんのためについてると思う」
アキラ「え？」
マスター「考えて、みんなも」
オモテ「しょうもな。何聞いてんのあんた」
マスター「考えて、考えて」
クミ「え、服を脱いだり着たりするためじゃないの？」
マスター「考えて」
クミ「え、え、……違う？」
アキラ「それ以外何があるんだよ」

マスター「アキラはえらいわやっぱり。こういうときちゃんと筋を通すし。なんでも本気や」
オモテ「何、気にしてんねんな」
マスター「え？」

オモテはマスターが話す最中に出て行き、マスター、クミ、モリも出て行く。

カヤはハッチを開け中にナツコを見つける。慌てて閉める。
カヤは再びハッチを開けて、閉める。

アキラ「あのさ」
カヤ「うあ！あ、……びっくりした、何？何？」
アキラ「……」
カヤ「あのさ、ちょっといい」
アキラ「何で住むことにしたんですか」
カヤ「……」
アキラ「ここに」
カヤ「え？」
アキラ「……」
カヤ「わ、私」
アキラ「……」
カヤ「いや、オモテさんに、誘われて」
アキラ「え？」
カヤ「……次の仕事が見つかるまで、とりあえず」
アキラ「本当に？」
カヤ「ほんと、え、ほんとだけど」
アキラ「（嘲笑）」
カヤ「？」
アキラ「何か気持ち悪いこと考えてんでしょ」
カヤ「……え、気持ち悪いことって何？」
アキラ「あんたが考えてることだよ」
カヤ「……」
アキラ「まあでも心配しなくていいよ。あの人だったら結婚できるから、誰でもいいから、あの人」
カヤ「なにいってんの？私別に」
アキラ「私別に？」
カヤ「……ね」
アキラ「私別に、何だよ」
カヤ「ちょっといい」
アキラ「……」
カヤ「どうしてそんなところにナツコさんがいるんだろ」
アキラ「……」

アキラが出て行く。
カヤはもう一度ハッチを開けようとするがクミが出てくる。

カヤ「クミちゃん？」
クミ「カヤちゃん、ちょっと、お願いがあるんやけど」

カヤ「どうした？何か……」
クミ「……」
カヤ「大丈夫？」

クミ、テーブル席に座る。カヤも向かいに座る。

クミ「私ちょっと……今……仕事ができなくて」
カヤ「……うん」
クミ「聞いた？」
カヤ「いや、何にも」
クミ「……わからへんねんけど、みんなには、鬱ちゃうかって」
カヤ「ああ……」
クミ「親にも……だいぶ助けてもらったんやけど、もうこれ以上は無理って言われてて……」
カヤ「マスターと上手くいってないんだよね？」
クミ「……」
カヤ「ね、クミちゃん、聞いて」
クミ「……」
カヤ「ナツコさん……ナツコさんがそこにいる」
クミ「……」
カヤ「なんであんなところにナツコさんがいるのか知ってる？私が覗き込んでもナツコさん反応しない。こっち見ないの。目のところにすごいアザがあって、マスター、マスターがやったんじゃない」

マスターが奥から出てくる。

カヤ「……」
クミ「カヤちゃん、悪いねんけどお金、貸してくれへん？」
カヤ「……いくらぐらい？」
クミ「……」
マスター「三ヶ月ぐらいで治るやろ」
クミ「……（頷く）」
カヤ「三ヶ月、」
クミ「うん」
カヤ「三ヶ月で、何が治る？」
クミ「鬱」
カヤ「あー……」
クミ「うん」
カヤ「じゃあ」
クミ「１００万ぐらいあったら」
カヤ「ちょっと、１００万は難しいけど、」
クミ「じゃあ５０万」
カヤ「うん。それだったら」
クミ「ありがとう」
カヤ「病院は行ってるの？」
クミ「（首を振る）」
カヤ「一緒に行く？」

マスター「病院なんかいっても治るか？鬱なんか、気持ちの問題やろ」
カヤ「でも、」
マスター「金ばっかりとって……ほんま警察と病院だけは信用できひんわ」
カヤ「クミちゃんはどうなの」
クミ「入籍してん、うちら」
カヤ「えっ」
クミ「……」
マスター「……」
カヤ「そうなんだ」
クミ「うん」
カヤ「そっか……」
クミ「……」
カヤ「えっでも病院はいこうよ」

オモテ、奥から~~コート~~を着て出てくる。

オモテ「カヤちゃん、ご飯行くで」
カヤ「え？」
オモテ「みんなで、ね」
カヤ「あれ、でも」
オモテ「愚痴らして、たまには私も。な」

モリが奥から出てくる。

オモテ「モモリちゃんも行くって」
カヤ「ハァ、」

マスター奥から出てきてオモテ外へ出て行く。

カヤ「クミちゃんは？」
クミ「私ちょっと今日は、やめとく」
オモテ「(奥から) カヤちゃーん」
クミ「行って」
カヤ「でも」
クミ「お金……もしあれやったらマスターに渡しといてもらったら助かる」
カヤ「え？」
クミ「ごめん」
マスター「カヤちゃん。お母ちゃん呼んでる」
カヤ「あ、はい……じゃとりあえず帰ってきたらもう一回、」
クミ「なんなんもう！私には貸したくないってこと？」
カヤ「……いや、違う……」
クミ「それやったらお金おろして、マスターに渡して」

クミ、奥に出て行く駆け込む。

マスター「行こか」
カヤ「でも、クミちゃん」
マスター「俺が、残るわ、一緒に」
カヤ「……マスター」
マスター「ん？」
カヤ「私も残ります」

モリはカヤの手を持つ。

モリ「行こう。な」
カヤ「……」

オモテ、戻ってくる。

オモテ「何してんの？」
マスター「なんかカヤちゃん調子悪いらしくて」
オモテ「え？」
マスター「どうしょうか、言うてたんやけど、な」
モリ「うん」
オモテ「そうなん、大丈夫？」
マスター「どうや」
モリ「どう」
カヤ「……だいぶ良くなってきました」
オモテ「じゃあ焼肉食べて精つけよ。な！」
カヤ「え」
オモテ「行くでー」

オモテはカヤの肩を抱いて出て行く。
モリもあとを追う。そしてクミが毛布を持って出てくる。

マスター「やるぞ」
クミ「生きてるの、まだ」
マスター「……どっちでもええ」
クミ「せっかく、一生懸命、世話してもらったのに。なあ、アホやな。逃げて。逃げへんかったら、こんなことならへんかったのに」

マスター、ハッチを開けようとする。

クミ「マスター、待って。殴って」
マスター「……」
クミ「５０万しか無理やった。殴って」
マスター「クミちゃん……」
クミ「お願い。怖い、私」
マスター「なんで今やねん、ほんま、勘弁してくれよ」
クミ「……」
マスター「お前どうかしてるぞ。な。大体いちいち口答えするから嫌われるんやん。黙っといたらええねんそしたらこんな、しょ

うもないことでいちゃもんつけてこうへんねや」
クミ「……」

マスター、ハッチを開ける。

3

その日の真夜中。　オモテのいるところにカヤがやってくる。

オモテ「ごめんねカヤちゃん、夜中に起こして」
カヤ「いえ」
オモテ「眠たいやろ」
カヤ「はい。あ、大丈夫です」
オモテ「……」
カヤ「……」
オモテ「最近あかんわ、焼肉食べたら夜中に上がってくる」
カヤ「ああ、」
オモテ「カヤちゃんは大丈夫なん」
カヤ「はい、」
オモテ「若いな、やっぱり」
カヤ「いやぁ」
オモテ「お兄さんが電話してこられてね」
カヤ「……え？……うちの兄ですか？」
オモテ「そう」
カヤ「なんで」
オモテ「カヤが会社休んでるって」
カヤ「ええ？！」
オモテ「私のせいで」
カヤ「嘘……」
オモテ「マスターがめちゃくちゃ怒ってて。お兄さんに電話番号教えた？私の」
カヤ「いえ」
オモテ「じゃあやっぱり、実家のご両親が教えたんやろうね」
カヤ「すいません、何やってんだろ、うちの親」
オモテ「事情聞こうと思ってすぐ、実家の方にも電話したんやけど、ずっと留守電やねん。電話も、ケータイも、何もかも」
カヤ「ちょっと、かけてみます」

カヤ、スマフォを取り出し、実家に電話する。誰も取らない。

カヤ「明日の朝、もう一回」
オモテ「何回かかけてみて」
カヤ「え？」
オモテ「起きるかもしれへん、電話の音で」

カヤは何度か電話するが、やはり誰も出ない。

オモテ「行こか」

カヤ「え？」
オモテ「カヤちゃんの実家。みんなで」
カヤ「いや、えっと」
オモテ「あかん？」
カヤ「いや、そうじゃなくて」
オモテ「お肉のお礼もしたいし」
カヤ「じゃあ、明日の朝、」
オモテ「行こう。みんなに言うてくるわ」
カヤ「ちょっと待ってください、今からですか」
オモテ「うん」
カヤ「もう、夜中の3時ですけど」
オモテ「せやけど明日は遅すぎるやろ」
カヤ「じゃああの、行っていいかどうか、聞いてからでもいいですか」
オモテ「誰に？」
カヤ「両親に」
オモテ「でも電話でやらへんやん」
カヤ「はい、なので明日の朝」
オモテ「来ていいよって言われたらそこから私ら準備するの？」
カヤ「あ、じゃ行くのはあさってに」
オモテ「じゃあその間私はずっと誤解されたままか」
カヤ「え？」
オモテ「せやけどもう仕事したぁらへんねやろ？ご両親」
カヤ「はい」
オモテ「ほんならええやん、どうせ家におんねやろ？誤解、解きたいし。あとほら、会って、話しして、安心させてあげたいねん、カヤちゃんのご両親」
カヤ「……わかりました」
オモテ「お兄さん家は近くなん？」
カヤ「・・はい」
オモテ「ほんならちょうどええわ。実家に来てもらって、話するわ。私から」
カヤ「……すいません」
オモテ「まかせとき。私が言うたら、絶対わかってくれるから。……どうした？」
カヤ「……ナツコさんがいるんです……そこに」
オモテ「え？」

カヤ、ハッチを開けるが中には誰もいない。

カヤ「さっきは、確かに、ここに、ナツコさんがいて」
オモテ「こんなところに？」
カヤ「はい」
オモテ「……入れる？ナッちゃん。こんなところに」
カヤ「いや、」
オモテ「よう肥えてたやろ、覚えてない？」
カヤ「でも本当にいたんです。顔に、あざみたいなのがあって……確かにこんな狭いのにぎゅっとなってて、自分で、入ったとはあ

んまり、思えなくて……」
オモテ「そっか」
カヤ「……」
オモテ「このこと、誰かに言った？」
カヤ「……クミちゃんに」
オモテ「あの子はなんて？」
カヤ「話、そらされました」
オモテ「やっぱりな」
カヤ「え？」
オモテ「あの子、マスターと結婚したがってたから」
カヤ「……えっでも、」
オモテ「そうは思いたくないけど、ナッちゃんのこと、邪魔やったんちゃうかな」
カヤ「……」
オモテ「あの子、人情っていうかな、いい子やねんけどね、そういうのがどうもわからへんみたいでさ。自分がこうしたいと思ったら、他の人が傷ついてもお構いなし、みたいなところがあって。だからナッちゃんがどこいったか、クミちゃんやったら知ってるかもしれへん」
カヤ「さっき聞いたんですけど、何日か前にうちの実家に電話してきて、お金貸して欲しいって言ってきたらしくて」
オモテ「ええ？」
カヤ「私が、怒られてしまって……」
オモテ「そうか」
カヤ「そのあと、兄にも、電話したらしくて」
オモテ「それでか」
カヤ「……」
オモテ「それでカヤちゃんの実家、心配してんねんやんか。あの子ほんま、ちょっと言うたらなあかんな」

オモテ出て行く。

―アキラがカバンを持って戻る。―

カヤ「おかえり」

アキラはカバンからカメラを取り出す。―が出てきて勝手にカヤを撮る。

カヤ「ちょっと」
アキラ「１０万」
カヤ「え、」
アキラ「このカメラ」
カヤ「へえ」
アキラ「こないだの、壊れちゃったから」
カヤ「なんで？」
アキラ「誰かが投げたんじゃない。思いっきり。壁に向かって」
カヤ「なんでなんで」
アキラ「あんたの顔ばっかり映ってたからだよ」
カヤ「……で、どうしたの、それ」

アキラ「盗ってきた」
カヤ「ちょっと待って、今、なんて？」
アキラ「盗ってきた」
カヤ「……」
アキラ「なに、あいつと付き合ってるから自分も親みたいな気持ちになっちゃってんの？」
カヤ「え？」
アキラ「……」
カヤ「なにそれ」
アキラ「だってそういう目で見てんじゃん」
カヤ「返しに行こう。ね」
アキラ「どこに」
カヤ「これ、盗ったとこ」
アキラ「今から？」
カヤ「……明日の朝」
アキラ「あ、警察に突き出すっていう話？」
カヤ「ちゃんとモリさんと一緒に行って、謝ったら大丈夫だから」
アキラ「何が」
カヤ「……」
アキラ「何が大丈夫なの」
カヤ「……」
アキラ「あんた、邪魔なんでしょ、俺が」

アキラ、出て行こうとする。

カヤ「あんたこそ邪魔なんでしょ、私のこと」
アキラ「……」
カヤ「大好きなお父さんが取られそうだから、嫉妬してるんでしょ」
アキラ「ハァ？」
カヤ「安心してください。あなたのお父さんとは別に、付き合ってないから私」
アキラ「……」
カヤ「仮に付き合ってたとしても、あんたと私は他人だから。警察に行ってあんたがどうなるかなんか、知るか」

カヤはカメラを取り上げるがアキラはすぐに奪い返す。
カヤはアキラからカメラを取ろうとする。

アキラ「放せよ。何やってんだよ。気持ち悪い」
カヤ「あんたこそ気持ち悪いわ。力だけ強いガキのくせに」

アキラはカヤを押し倒して首をしめる。
モリが出てきて、アキラをカヤから引き離す。

モリ「何やってんねん」
カヤ「大丈夫」
モリ「何も大丈夫なことあらへん」

アキラ、出て行こうとする。

モリ「お前ちょっと待て」
アキラ「警察いけよ」
モリ「……」
アキラ「警察行って俺のこと全部話せよ」
モリ「……」
アキラ「怖いんだろ、自分まで捕まるかもしれないって」
モリ「違う」
アキラ「じゃ何だよ」
モリ「……」

アキラ、奥へ。

モリ「悪かった」
カヤ「え？」
モリ「アキラが」
カヤ「……」
モリ「あいつ……感情が高ぶったら手が出る」
カヤ「……」
モリ「ハッチの中に落ちてた。あいつがナッちゃんを、ハッチに閉じ込めたんかもしれん」
カヤ「オモテさんに言わなきゃ」
モリ「え？」
カヤ「オモテさん、クミちゃんがやったって思ってます、それ」
モリ「ちょっと待って」
カヤ「え、」
モリ「……ごめん。せやな。言った方がいい」
カヤ「……」
モリ「あいつがそういうことしたって、やっぱり思いたくないねん、俺」
カヤ「やめときましょう」
モリ「……」
カヤ「本当のことはわからないんだし、まだ。それに、クミちゃん、ちょっとおかしくて、今」
モリ「……」
カヤ「ナツコさんを閉じ込めたのは、クミちゃんかもしれません」

間

カヤ「……私ダメだ、ちょっと、外の空気吸ってきます」
モリ「(カヤの腕を掴む)」
カヤ「え？」

モリはカヤの腕を離す。

カヤ「モリさんはアキラ君がいるからここに住んでるんですよね」

モリ「え？」
カヤ「……」

カヤのスマフォからラインの着信音が鳴る。

カヤ「もしもし？……ああ。ごめん、その話じゃなくて……あのさ……うん、あのさ、お兄ちゃんが会社休んでるの、怒ってるって本当？……あ、そう……え？……あ、そう……あのさ、今って、家にいる？……あ、そうなんだ、……そっか……え、いつ帰ってくんの？……そっか。わかった。……うん、大丈夫。また、話すわ……え、もう、いいって。……もういいって言ってんじゃん。ねえ、お兄ちゃんの意見とか、どうでもいいから本当に」

カヤは電話を切る。
マスター、オモテが出てくる。

マスター「よし、明日の旅行の話しようか」
カヤ「……あ、明日になったんだ」
マスター「何泊ぐらいできるやろ、埼玉ってなんかあった？おもしろいとこ、カヤちゃんとこ泊めてもらえるやろ？」
カヤ「明日は、うちの両親、いないそうです」
オモテ「え？」
カヤ「今、旅行行ってるみたいで」
オモテ「……電話かかってきたん」
カヤ「はい」
オモテ「そうか」
カヤ「すいません」
マスター「なんでお母ちゃんにかわらへんかったん」
カヤ「あ、」
マスター「なんで？」
カヤ「ごめんなさい」
マスター「モリ、どう思う？」
モリ「……どう思うっていうのは」
マスター「俺ら疑われてんねん。カヤちゃんの実家」
モリ「ああ……」
マスター「どう思う。謝りに来るべきやと思わへんか、旅行中止して。勘違いしてごめんなさいって」
オモテ「せやけど元はと言えばあんたの奥さんがカヤちゃんの実家に電話してお金借りようとしたからこんなことになったんちゃうの」
マスター「……」
オモテ「あんたがなんとかするべきちゃうの、ほんまは」
マスター「ああ……」
オモテ「カヤちゃん。クミちゃん、ちゃんと怒っといたからな」
カヤ「すいません」
オモテ「カヤちゃんは悪くない」
カヤ「私、明日、両親のところまで行って、事情説明してきます」
オモテ「え？」

カヤ「旅行先まで行って。自分で、自分の意思で休んでるんだってちゃんと言ってきます」
オモテ「ああ……」
マスター「だからなんでカヤちゃんがそれを決めるねん」
オモテ「ほな誰が決めんの？」
マスター「……」
オモテ「あんたが決めるんか」
マスター「せやけどカヤちゃんのお兄さん許せへんやん。勝手にお母ちゃんの電話番号教えて」
オモテ「まあ、確かに、それはそうや」
カヤ「ごめんなさい、本当に、ごめんなさい」

アキラ出てくる。

マスター「ちょっと思いつきなんやけどな、アキラ送り込むっちゅうのはどうや」
カヤ「え？」
マスター「カヤちゃんの実家に。息子やろ、アキラはモリの。ということは、カヤちゃんの実家は、アキラの実家ってことや」
オモテ「ほんでどうすんの」
マスター「常識教えたんねん、家族の皆さんに」
カヤ「あ、ちょっとそれは待ってほしい」
マスター「なんで？」
カヤ「まだ言ってないんで、そういうこと」
マスター「言ったか言ってへんかとかそういう話じゃないねん。事実そうやろって言うてんねん」
オモテ「あんたいい加減にしいや」
マスター「……」
オモテ「またアキラたらい回しにするんか」
マスター「や、たらい回しっていうか」
オモテ「親の都合であっち行ったりこっち行ったり、知らん人の家預けられていじめられて、しまいに父親の再婚相手の実家で常識教えてこいってか」

間

オモテ「あんたも一緒に行き」
マスター「あ、」
オモテ「二人で行って、常識教えてきたらええわ。その代わり、アキラはあんたが守るんやで」
マスター「わかった」
オモテ「まぁ、あとはみんなで考えて。どうしたらいいか。私はも、寝るわ……あ、それから、モモリちゃんとカヤちゃん。明日あんたら、入籍し」
モリ・カヤ「え」
オモテ「アキラが行くんやったら早い方がええやろ」

オモテ、出て行く。

アキラ「なんの話」
マスター「お前今から荷造りしてこい」
カヤ「いや、でも、私たち、入籍どころか付き合ってもない」
マスター「関係ない」
カヤ「え？」
マスター「明日中に入籍しといてや。頼むで」
カヤ「なんで、」
マスター「お母ちゃんがそうせえ言うたからや」
カヤ「でも」
マスター「カヤちゃん頼むわ。この通り」
カヤ「えっ」
マスター「モリのこと、どう思ってんの」
カヤ「……いやっ、どう思ってるとかじゃないですよね」
マスター「なんで？」
カヤ「だって」
マスター「俺のことが好きなんか」
カヤ「……」
マスター「冗談や」
モリ「お前よくこんな時にそんな冗談言えるな」
アキラ「俺、行きたくないんだけど、この人の実家とか」
マスター「ちょ、それあんた、直接言って？お母ちゃんに」
アキラ「あんたが言い出したんだろ」
カヤ「とにかく、私はまだ、入籍できないし」
マスター「シー！」
カヤ「それとは別に、この人にも実家に行って欲しくないです」
アキラ「だからいかないって言ってんだろ」
マスター「もうみんなわがままやな、なんでやねん。なんでそうなるねん。ややこしい方ややこしい方に行こうとしてんのわからんか？」
カヤ「どういうこと？」
マスター「ええか。言うたとおりせんかったら、また誰かがクミちゃんみたいになんねんぞ」
カヤ「え？」
モリ「クミちゃん今どうなってるん」

カヤ、奥に行く。

マスター「どうすんねんほんまもう……」
モリ「……」
マスター「明日二人で行ってきたらどうや、なんか旅行してんねやろ、そこに」
モリ「……うん」
マスター「入籍した後、その足で。な」
モリ「わかった」
マスター「金、用意するように言えるか」
モリ「うん」
マスター「５０万とか１００万じゃあかんねん」

モリ「……」
マスター「当面、生活できるぐらいは必要や」

アキラのスマフォからゲームの音が鳴る。

モリ「わかった」
マスター「ああ、もう！……お母ちゃんに言うてくる。……帰ってこいよお前ら。帰ってこんかったらマジであいつらみたいになるぞ」

マスター、奥へ行く。

モリ「お前も行くか？」
アキラ「……」
モリ「一緒に」
アキラ「……」

カヤ、モリ、奥へ行く。　アキラ、残される。

アキラ「何誘ってんだよあいつ」

しばらくしてオモテと一緒にカヤとモリが出てくる。

オモテ「カヤちゃんのせいじゃない」
カヤ「……」
オモテ「ここに住む人間は、お互いに思いやりを持って接することとって、最初私、言うたよね。覚えてる？それがこの家のルールやって」
カヤ「はい」
オモテ「クミちゃんの顔見て、びっくりしたやろ」
カヤ「……」
オモテ「ルールを破ったら罰がある。当たり前のことや。ああやって、あの子はちゃんと愛がわかる人間に育つねん。思いやりがわかるようになるねん。手が出るってことはな、愛があるってことやねん。クミちゃんのこと友達やと思うんやったら、あんたも言うことはちゃんと言わなあかん」
カヤ「はい」
オモテ「この子は、アキラはそれができる子や。最初あんた此処に来た時、なあ、ナッちゃんに嫌味言われて、引き取る、面倒みるって言うたくせにナッちゃん、もう嫌やって言い出して、あんただけご飯作ってもらえへんでな。その時この子どうしたと思う。殴ったんよ。ナッちゃんを。自分の手で。それがどんなに痛かったか、もう想像しただけで私しんどくなる」
カヤ「……」
オモテ「旅行から帰ってきはったらすぐ教えて。私も一緒に行くわ」
カヤ「いいんですか」
オモテ「あんたは私の家族やねんから」

オモテは奥に行く。

カヤ「……」
モリ「カヤちゃん……大丈夫か」
カヤ「よかった。お母さん許してくれた」

カヤ、奥へ。

アキラ「出ていけよ」
モリ「……」
アキラ「あの人連れて、今」
モリ「あのな。……お前にはわからへんと思うけどさ」
アキラ「……」
モリ「出て行くわけにはいかへんねん」
アキラ「俺のせいだっていうんだろ」

アキラ、奥へ。モリ、残される。

4

3の一週間後。雪が降っている。
一家はカヤの実家に押しかけ、50万円を手にした。
オモテが外から帰ってきてカウンターに座る。

床下には瀕死のクミがいる。

オモテ「あー寒」

マスター、モリ、荷物を持って帰宅する。

オモテ「寒」
マスター「お母ちゃん、全部冷凍庫にしもとくで」
オモテ「アキラは？」
マスター「まだ車ん中。ゲームしてるわ」
オモテ「モモリちゃん、呼んできて」

モリ、出て行く。カヤ、荷物を持ち入ってくる。

オモテ「あんた、計算得意？」
カヤ「え？」
オモテ「計算」
カヤ「……ああ、まあ普通の、足し算とかなら」
オモテ「50万わる……せやなぁ……6にしよか」
カヤ「はい、」
オモテ「計算して。50わる6」
カヤ「……8万、」
オモテ「一人八万円」
マスター「八万円って……一人八万円で何ヶ月生活できる？」

カヤ「……」
マスター「カヤちゃんの実家の皆さん、計算が苦手みたいやな。だって大の大人が６人もいる家族に５０万円って、何ができる？５０万で」
カヤ「すいません。ほんとに恥ずかしい」

モリ、コンビニ袋を持って出てきてハッチを開ける。

モリ「……クミちゃん。クミちゃん。……飯」
クミ「……」
モリ「クミちゃん」
マスター「それ後にせえ」

モリ、ハッチを閉める。

マスター「な、どう思う。モリ。夫として」
モリ「……」
マスター「結婚したっ言うてんのに、お祝いももらえへんかったな。どうなってんねんほんま」
カヤ「すいません」
モリ「カヤちゃんが謝ることちゃう」
マスター「ハァ？」
オモテ「モモリちゃんあんた、何言うてんの」
マスター「自分の家族が粗相したら謝らへんのかお前」
カヤ「ごめんなさい、ごめんなさい本当に」
マスター「モリ」
オモテ「カヤちゃん、あんた災難やなあっちもこっちも」
カヤ「すいません……」
マスター「ていうかカヤちゃんのお兄ちゃん、頑固やなあ。俺あいうタイプ一番嫌いやねん。人を見下して、ニコリともせんかったやろ。はるばる埼玉まで来たってんのに」
カヤ「……」
マスター「ほんでお母ちゃん。あれも、どうしようもないな、お兄ちゃんお兄ちゃん言うて。どうなん、カヤちゃんあれ」
カヤ「私もそれが、昔からあんまり……」
マスター「せやろ？カヤちゃんのお母ちゃんあれ完全に依存してるわ、お兄ちゃんに。旦那に相手にされへん女の典型的なパターンや。そうやってお互いダメにしあってんねん。どこにでもおるなああいうの」
カヤ「私、働きに出ます」
オモテ「……」
カヤ「家族のみんなのために、働いてきます」
オモテ「……」
カヤ「あの、駅前のスーパーがレジを募集してて」
マスター「何でそれカヤちゃんが決めんねんな」
カヤ「え？」
マスター「スーパーとか、金にならんやろあんなとこで働いたって」

オモテ「カヤちゃん、みんなのために稼ぎたいって、それ、ほんまに思ってるの？」
カヤ「思ってます」
オモテ「覚悟できてんねんな」
カヤ「はい」
オモテ「体売れ言うたら売れるんか」
カヤ「……」

間

マスター「モリ、お前ら夫婦やろ。夫婦やったらお前が怒らなあかんのちゃうんか。なあ。カヤちゃんもそうやけど、お前らほんまにこの家族のこと一番に考えてんのかいな」
カヤ「私は、この家族のことが一番大事です」
マスター「お前は？」
モリ「……」
マスター「なんで黙ってんねんな。黙ってたらそのうち終わると思ったら大間違いやぞ」
モリ「……」
カヤ「モリさん」
マスター「モリ」
カヤ「私のこと、殴ってください」

カヤはモリの前に立つ。

モリ「え？」
カヤ「私、甘えてました。今回のことは、全部私のせいなんです。お願いします、殴ってください」

モリはカヤを殴ろうとする。アキラがモリの手を掴む。

カヤ「離して」
マスター「おい」
カヤ「邪魔しないで」
マスター「おいお前、アキラ」

マスターはアキラを殴ろうとする。モリがアキラをかばう。

アキラ「ふざけんなよ。何が家族だよ。こんなの家族じゃねえよ」

アキラは出て行く。マスター後を追おうとする。

オモテ「もうほっとき」

オモテはハッチを開ける。

オモテ「クミちゃーん。元気か。生きとるか……三日間何も食べんでも人間って生きてられるんやな。どうや？反省した？」

クミが~~トンチ~~から出てくる。オモテはハッチを覗き込んだままだ。

クミ「ほんま、アホちゃうかって思うねん、自分のこと。みんなそう思ってんねやろうな。せやけどどんなに頑張っても、こうなってしまうねん。次こそはちゃんとやろうと思うねんけどな。ちゃう、真面目にやってんねんで、私は。でも、一生懸命やっても、……一生懸命やったら、いつも、空回りする。なんでなんやろ？カヤちゃんはどう？やっていけそう？」

カヤ「クミちゃん？」

クミ「やっていけそう？トラスト」

カヤ「……ああ、うん」

クミ「そっか」

カヤ「クミちゃんは？」

クミ「……」

カヤ「やっぱりやめちゃうの、トラスト」

クミ「私は写真が撮りたいから」

カヤ「だからそれ、トラストでやればいいじゃん」

クミ「ここでは無理」

カヤ「確かに、ちょっと、無駄なことは多いけど」

クミ「私、カヤちゃんの顔、好きやねん」

カヤ「え？」

クミ「でもこれ以上ここにいたら、それも嫌いになってしまう」

カヤ「……」

クミ「そんなことになったら私、写真が撮れなくなる」

カヤ「クミちゃん、疲れてるんだよ」

クミ「……」

カヤ「ちょっと休んだら？」

クミ「……」

カヤ「休んで、また戻ってきたらいいじゃない。トラストに、ね」

クミ「そうかなぁ」

カヤ「……」

クミ「私、疲れてんのかなあ」

カヤ「うん、だって顔色悪いし」

クミ「そういえば私、最近全然寝られへんねん、ご飯もあんまりちゃんと食べれへんし、トイレも1日1回しか行けへんし、あと、さっき、自分でもちょっと怖くなるぐらい、いっぱい血が出てん」

クミ、横たわる。

オモテ「クミちゃん、……逝ってしもた」

マスター「うん」

オモテは手を合わせる。

オモテ「あんたら手も合わせられへんのか」

全員、クミに手を合わせる。

オモテ「(モリに) 悪いけどマスター手伝ったって」
モリ「……」
オモテ「それからカヤちゃん。モモリちゃんも。さっきの話、どうしたらいいか考えといて」

オモテ、外に出て行く。マスターは一度出て行って、毛布を持って戻る。
そしてクミに毛布をかける。

マスター「手伝ってくれ」
モリ「いやや」
マスター「はぁ?」
モリ「手伝えへん」
マスター「モリ頼むわ手伝って、穏便にいこう」
モリ「誰がやったん」
マスター「誰がやったんて、見てたやろ」
モリ「(首を振る)」
マスター「こいつが勝手に死によったんや……ほら、はよ持て」
モリ「……」
マスター「も、何やねんお前……あーあ。どうせそのうち、アキラも探しに行かなあかんようになるやろし。もう俺いやや。だからお前、来んなって言うたんや俺。こうなるってわかってたから」
モリ「こうなるって?」
マスター「今の状況や」
モリ「ナッちゃんが死んで、クミちゃんが死んでってことか」
マスター「……」
カヤ「マスターは、悲しくないんですか」
マスター「は?」
カヤ「……」
マスター「こいつが悪いんや」
カヤ「……」
マスター「こいつが余計なこと言うたり、下手ばっかりうちよるから俺どんなにとばっちり受けたか。黙ってたら済むこと黙ってられへん。お母ちゃんもクミちゃんがそういうタイプやってわかってるから面白がって俺と入籍させて……ナツコもそうやってん。一言多くてお母ちゃんを怒らせる。俺はずーっと尻拭い担当や。せやけど尻拭いしても尻拭いしてもこいつら懲りひんねや。だから結局、ナツコもクミちゃんもこんなことなって」
モリ「マスター、」
マスター「モリ、頼むわ……足持って。穏便にいこう。な。言われたことちゃんとやってたら、少なくとも俺らは平和に生きていけるんやから」
カヤ「……」
マスター「お前ら、わかってんのか?ここに死体があんのバレたら、全員、警察行きやぞ」
モリ「いこう」
マスター「……」
モリ「警察。こんなんやっぱりあかんわ」

マスター「モリ」
モリ「俺、わからへんねん。なんでお前がそういう風になったんか。俺の知ってるマスターは」
カヤ「モリさんよくこんな時に綺麗事言えますね」
モリ「え？」
カヤ「クミちゃんのこと、こんなところにほっとけない。ちゃんと、弔ってあげたい」
モリ「それはわかってるよ」
カヤ「そのためには、この家族がちゃんとしてないと、ダメじゃないですか」
マスター「カヤちゃんの言う通りや。今警察行ったら、お前の息子こそ捕まるぞ。あいつが捕まったら、お母ちゃんおかしくなるやろな。そうなったらもう俺、お前らのことは守れへん」
モリ「……マスター」
マスター「はよせえ！」

モリとマスターはクミを外に運んでいく。
カヤはハッチを閉める。モリが戻ってくる。

カヤ「マスターは」
モリ「アキラ探しに行った、ミサちゃんと一緒に」

カヤとモリは座る。

モリ「ごめん、さっきは」
カヤ「……」
モリ「悪かった。殴ろうとしてしまって」
カヤ「何で？」
モリ「殴らんと、もっとひどいことになるって聞いたから」
カヤ「そうじゃなくて」
モリ「……」
カヤ「悪いのは私じゃないですか。モリさんは殴るべきなんですよ私を。違いますか」
モリ「……」
カヤ「もう一回やりましょう」
モリ「……」
カヤ「お願いします。殴ってください」
モリ「……」
カヤ「……」
モリ「いや、やっぱり無理や」
カヤ「さっきできたじゃないですか」
モリ「いや、」
カヤ「やろうとしたじゃないですか」
モリ「したけど」
カヤ「お願いします。殴ってください。お願いします」

モリ、クミを平手打ちする。

カヤ「こんなんじゃダメだ、跡が付くぐらいじゃないと」
モリ「逃げよう」
カヤ「……」
モリ「ここから、今」
カヤ「……」
モリ「アキラの言う通りや。俺らは、ここにいたらあかん。逃げて、アキラ探し出して、3人でどっか違うところに」
カヤ「それで私が「うん」って言ったらモリさんはどうするんですか」
モリ「え？」
カヤ「それを誰に言うんですか」
モリ「……カヤちゃん」
カヤ「ね、誰かに言って誘いに乗った私を捕まえにくるんでしょ」
モリ「何をいうてんの」
カヤ「違いますか」
モリ「何でそんなこと俺がせなあかんねん」
カヤ「……」
モリ「俺はほんまに、逃げたいと思ってる。カヤちゃんはどう思ってる」

間

カヤ「思ってない、私逃げたいなんて思ってない」
モリ「何で」
カヤ「お金も何にもないじゃないですか。免許証も、カードも、ケータイも何にも持ってない」
モリ「それやったら警察に」
カヤ「クミちゃんが死んだことは、どうなりますか」
モリ「……」
カヤ「モリさん運びましたよね、車に。どうなりますか」
モリ「……」
カヤ「私はここに残ります」
モリ「……」
カヤ「逃げたいんだったら、私が見てないところで逃げてください」
モリ「カヤちゃん」
カヤ「ごめんなさい」
モリ「わかった。俺もここに残る」
カヤ「……」
モリ「変なこと言うてごめん」
カヤ「車に飛び込むっていうのはどうですか」
モリ「え？」
カヤ「モリさんみたいに、あれは、事故ですけど。そうだ、それならできる気がする、私」
モリ「事故じゃない」
カヤ「……」
モリ「飛び込んでん、あれ、俺。自分で」
カヤ「なんで……」

モリ「アキラの養育費、払ってなかったから」
カヤ「……」
モリ「死ぬと思ったけど、死なんかった。偶然や。ほんまは死ぬ気で行った」
カヤ「……なんで」
モリ「……」
カヤ「……」
モリ「今もまだちょっと、痛い」
カヤ「コツ、教えて下さい」
モリ「え？」
カヤ「死なないようにぶつかるコツ」
モリ「……」
カヤ「ほら、私も保険入ったじゃないですか、」
モリ「カヤちゃん、」
カヤ「今から行きます。私、お母さんに言ってきます。めっちゃいいアイディアだ、私、それだったらできると思う、モリさんの手も借りなくて済むし」
モリ「ちょっと待って」
カヤ「……」
モリ「あいつ、止めたんや、殴るの」
カヤ「……」
モリ「なんで止めたかわかるか」
カヤ「アキラ君のために、死ぬなってことですか」
モリ「違う」
カヤ「じゃなんなんですか」
モリ「……俺は、カヤちゃんに、死んでほしくないねん」
カヤ「……思うだけなら、簡単ですよね」

オモテ、出てくる。

カヤ「お母さん、私、ちょっと行ってきます。車、飛び込んできます」
オモテ「カヤちゃん」
カヤ「すいません、すぐに思いつかなくて。最初からそうすればよかった。私、この家族が大好きなんです。みんなのことが大切なんです。みんなのためだったら、ちょっとぶつかるぐらい、全然平気なんです」
オモテ「ちょっと待ちいな」
カヤ「……」
オモテ「十分や」
カヤ「え」
オモテ「あんたのその気持ち、聞けたからもう、十分や」
カヤ「お母さん……」
オモテ「会った時からな、あんたとはなんか、うまくいく気がして……。ちょっと気強いとこも、真面目そうなとこも、もし私に娘がいたら、こんな感じかなあって」
カヤ「私も……」
オモテ「……」

カヤ「こんな人がお母さんだったらよかったのにって、ずっと思ってました」
オモテ「私は本気やからな」
カヤ「はい」
オモテ「私の家族には、私と同じように本気で家族のこと考えて欲しいって思うねん。それが、家族ってことやから」
カヤ「……はい」
オモテ「よし。ほんならこの話はこれで終わり！」
カヤ「……すいませんでした本当に」
オモテ「ところであんたらどうなん。ちょっと二人で旅行でも行ってきたら？」
カヤ「え？」
オモテ「お金出すし、新婚旅行。行っといで。そんな長いことは無理やけど、どっか行きたいとこないの」
カヤ「えー」
オモテ「私も早く、孫の顔見たいし」
カヤ「お母さん……」
オモテ「モモリちゃんは？どっか行きたいとこないの」

オモテの携帯が鳴る。

オモテ「もしもし」
モリ「どこやろう、山かなあ」
カヤ「山」
モリ「キャンプとか結構好きやから」
カヤ「へえ」

オモテは携帯を切る。

カヤ「じゃあみんなで行こう。家族みんなでキャンプ」
オモテ「……」
カヤ「なんか、お母さんの笑顔見たら、ホッとしちゃった」
モリ「……うん」
カヤ「元気出てきました。私、なんでもできる気がする。この家族のためなら」
カヤ「頑張ります。ね」
モリ「うん」
カヤ「どこの山、行きますか」
モリ「わからん」
カヤ「え？」
モリ「全然知らんねん山のこと」
カヤ「え、どういうことですかそれ」

カヤ、笑う。マスター戻ってくる。

カヤ「おかえりなさい」

間

オモテ「モモリちゃん、悪いけど今から車、ひかれに行ってくれるか」
カヤ「……」
オモテ「急にまとまったお金が必要になった。頼むわ。うちらのために」

間

モリ「……はい」
オモテ「ありがとう。悪いな」
カヤ「え、あの、」
オモテ「……」
カヤ「ど、どう、な、なんでですか」
オモテ「何でって？」
カヤ「いや、」
オモテ「何でって何」
カヤ「……」
オモテ「ほな行こうか。出る準備し」

間

オモテ「今度はあんた、本気で行きや」
カヤ「待ってください」
オモテ「……」
カヤ「あの、」
オモテ「何」
カヤ「……」
モリ「カヤちゃん、大丈夫やから」
カヤ「でも」
モリ「な、待ってて。ここで」
カヤ「……」
オモテ「あんたでもいいねんで」
カヤ「……」
オモテ「あんたがいくか？車、ひかれてきてくれるか」
カヤ「……」
オモテ「どうやねんな。できるんか。モモリちゃんの代わりに死ねるんか」
カヤ「……はい」
オモテ「(笑って) あ、そう。死ねるんや」
カヤ「……」
オモテ「おかしい。あんた、実際車の前に立ってんのちゃんと想像した？足がすくむで。ものすごい速さで走ってる車に飛び込めるか。私はできるけど。なあ、そこまでちゃんと想像して喋ってんのか。なあ。あんた、自分の愛は本物やと思ってるんか。ほんまにうちらのこと、愛してるって言い切れるんか。うちらのために命差し出すほどほんまもんの愛があんたん中にあるって、本気で思ってるんか」

カヤ「思ってます」
オモテ「それやったら今すぐここで死ね」

間

オモテ「道具はいくらでもあるで。ほら。そこに包丁がある。クローゼットにロープがある。金属バットもある。どれでも好きなん使い」

カヤは動けない。

オモテ「モモリちゃん、手伝ってあげえな」

オモテ、座る。

オモテ「ほら、やっぱり死ねへん。嘘やろ。あんたの愛なんか、嘘なんや。……みーんな、ええとこだけ取っていく。私の言うことさえ聞いとけば楽できると思ってる。だっれもほんまは私の事なんか考えてないくせに、偽物の愛ちらつかせて近づいてくる。楽したいからな。だから試したんねん。ほんまに死ぬ気があるんか。ほんまに死ぬ気で愛してるんか、試したんねん」
カヤ「私、本気で愛してます……（奥へ行こうとする）」

カヤが奥へ行くのをモリが止める。

オモテ「あんた本気なんやな？」
カヤ「はい」
オモテ「よし。ほんならとりあえず、ここで死ぬのはやめて。保険が降りひん」
カヤ「……」
オモテ「交通事故やってことで、処理してもらいたいねんから、うまいことやらな。モモリちゃんに手伝ってもらって。な」
カヤ「・・はい」
オモテ「こっちおいで」

カヤ、オモテの近くへ。オモテはカヤを抱きしめる。

オモテ「ありがとう。頼むで。家族のためや」
カヤ「お母さん」
オモテ「ん？」
カヤ「教えてください、愛ってなんですか」
オモテ「え？」
カヤ「なんか、すごく怖くて……足が、震えてて……愛って、こんなに怖いんですか」
オモテ「みんな一緒や」
カヤ「ねえ」
オモテ「大丈夫。後からみんなすぐ行くから」
カヤ「お母さん」

オモテ「待ってて」
カヤ「怖い」
オモテ「大丈夫」
カヤ「お母さん」
オモテ「絶対大丈夫」
カヤ「大丈夫って、何が？」
オモテ「……」
カヤ「何が、大丈夫なんですか」

オモテ、カヤを突き飛ばす。

オモテ「嘘つき！」
カヤ「……」
オモテ「あんたの愛は偽物や！」
カヤ「……」
オモテ「出て行って。この家出て行って」
カヤ「お母さん」
オモテ「お母さんとか呼ばんといて気持ち悪い！」
カヤ「……」
オモテ「みーんなそうやった。結局自分のことしか考えてない。私に頼るだけ頼って、いざとなったら私のことは守れへん。ナッちゃんもクミちゃんも……マスターもモモリちゃんも、あんたもそうや。……アキラも……お母ちゃんも」

間

オモテ「……はよせな、警察くるで。アキラのアホ、警察に自首しよった」

5

1年後。カヤが喫茶店にやってくる。
事件が明るみに出て一通り捜査の終わった喫茶店。
土地建物は競売にかかったが売れず、残っていたところを放火された。
カヤはハッチのあった辺りに花を置く。
そこにモリがやってくる。

カヤ「来ないと思ってました」
モリ「……」
カヤ「思い出しますねいろいろ、ここ来たら、やっぱり」
モリ「燃やされたんかな、これ」
カヤ「……うん……」
モリ「もう、警察も何にも言わへんねんな」
カヤ「時間が経ったんですね、あれから」
モリ「うん……」

間

モリ「これ、カウンターかな……ここにマスターが立ってて」
カヤ「……」
モリ「(カウンターの席あたりに座る)」
カヤ「モリさんよくそこに座ってた」
モリ「うん」
カヤ「……」
モリ「……」

雪が降ってくる。

カヤ「あ・・」
モリ「お……寒いと思ったら」

クミ、出てくる。

クミ「あ、フナコシさん？エトウです。写真サークルトラストの」
カヤ「あ、」
クミ「初めまして。よろしくお願いします」
カヤ「……」
クミ「月一回、この喫茶店でミーティングするんです。だいたい、金曜の夜。１９時から。大丈夫ですか？」
カヤ「……はい」
クミ「ああ、よかった。宜しくお願いします」
カヤ「(頭をさげる)」
クミ「カメラ、持ってますか？」
カヤ「あ、これから買おうかなと思って」
クミ「もしよかったら色々教えますんで、何買ったらいいとか」
カヤ「あ、はい、ありがとうございます」
クミ「……」
カヤ「あ、じゃあ、買いに行くのついてきてもらってもいいですか」
クミ「はい、もちろん」
カヤ「すいません」
クミ「いえいえ、全然違ってきますから、撮れるもの、カメラで、本当に」

クミ、カメラをカヤに渡す。

クミ「撮ってみてください、試しに」
カヤ「えっ」
クミ「そこ押すだけで撮れるんで」
カヤ「(構えたりしてみるが)あ、でも何撮ったらいいんだろ」
クミ「何でも」
カヤ「……」
クミ「何で写真やりたいって思ったんですか」

カヤ、カメラを置く。

カヤ「わからないです、何でだろ」
クミ「……」
カヤ「でも、子供の頃は写真嫌いでした」
クミ「そうなんですか」
カヤ「はい。笑ってくださいって言われるから」

クミはカヤを撮り、その写真を見る。

クミ「私、カヤちゃんの顔好き」
カヤ「え？」
クミ「なんか、好き。好きな顔やねん」
カヤ「顔って」
クミ「風景撮るのが好きでさ、私。人を撮るのが苦手やねん。でも時々、風景の中に入って欲しいって思う人がいて。なんか、つかめない人っていうか」
カヤ「私が？」
クミ「ごめん。気持ち悪いやろ」
カヤ「クミちゃん、怒ってる？」
クミ「え？」
カヤ「私のこと。怒ってる？」
クミ「私は、写真が撮りたいだけやねん」
カヤ「……」
クミ「撮りたい写真、撮りたいように撮るためには、時間がいるから」
カヤ「ごめん」
クミ「また会いに来る」
カヤ「クミちゃん」
クミ「きて、カヤちゃんの写真撮る」
カヤ「クミちゃんはもう撮れない」
クミ「……」
カヤ「クミちゃんはもう、写真が、撮れない」
クミ「子供の頃さ、降ってくる雪、掴んだら水になるのが悲しくて、どうやって掴んだら雪のまま、手の中に残ってくれるんかなって、何回も何回も、いろんなつかみ方して、手が、冷たく冷たくなってさ、しもやけになって、結局、手が腫れちゃって一週間ぐらい何にも触れなくなったりして……」
カヤ「……」
クミ「でも写真には残るんよね、それが。写真には、ちゃんと、白い雪が、残るねん」
カヤ「クミちゃん」
クミ「カヤちゃんも一緒」
カヤ「クミちゃん、」
クミ「ありがとう」
カヤ「戻って来て」
クミ「バイバイ」
カヤ「クミちゃん」

クミ、いなくなる。

カヤ「クミちゃんのこと、あの日からずっと、考えてて……」
モリ「……」
カヤ「何でクミちゃんが死ぬことになったんだろうって、考え出したらもう止まらなくなって」
モリ「カヤちゃんのせいじゃない」
カヤ「……」
モリ「カヤちゃんは何にも悪くない。あれは、」
カヤ「本当にそうですか」
モリ「……」
カヤ「本当に私、何にも悪くないですか」
モリ「カヤちゃん」
カヤ「なんで、なんで私、クミちゃんが死んで行くの、止められなかったんだろう」

間

モリ「一緒に住もうか」
カヤ「え？」
モリ「一緒に」
カヤ「いや、大丈夫です、もう、ちょっと、誰かと住むのは」
モリ「別にそういうんじゃないよ」
カヤ「そういうのって」
モリ「かわいそうに思ってとか……好きとか」
カヤ「え、好きじゃないの」
モリ「……」
カヤ「……」
モリ「それぞれ、考えることがあって、一緒に住んだら、そしたら時々報告しあえるやろ、そういう意味で一緒に住むんやったら、いいかなあと……思わへん？」
カヤ「モリさんは、なにを考えるんですか」
モリ「……あいつのこと」
カヤ「……そっか」
モリ「……」
カヤ「……わかりました」
モリ「……同情とかやめてな」
カヤ「だからそれこっちのセリフですよ」
モリ「……」
カヤ「言ってください」
モリ「え？」
カヤ「誰かに好きって言ってもらわないと、私、やっぱり生きていけないです」

終わり